

GREEN EARTH 緑の地球

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

1993・10
20



【上左】ムスタンの沙漠・大渓谷・オアシス

【下左】水車小屋でトウモロコシを臼で挽く少年

【上右】ムスタン。家の窓から外を眺める幼女。

【下右】村の鍛冶屋さん

黄土高原ワーキングツアー報告会

参加予定=梶田・山下通夫両顧問・川島和義団長ほか。
団員が率直な印象を語ります。高見世話人の最新情報も。

●日時=10月14日(木)18時30分~

●会場=大阪市立弁天町市民学習センター

参加費 500円

ネパール緑化考察団報告会

豪雨、強風、砂塵の中の徒歩行。ムスタン郡サウル村との
緑化協力の合意。各地の環境事情をスライドを交えて。

●日時=10月19日(火)18時30分~

●会場=大阪市立弁天町市民学習センター

参加費 500円

大阪市立弁天町市民学習センターへは……JR大阪環状線「弁天町駅」北改札口、あるいは地下鉄中央線「弁天町駅」2A出口からORC2番街へ直通の連絡通路があります。そこから中央のエレベーターで7階へ！

西留郷にヤオトンが建つ

高見 邦雄 (GEN世話人)

9月始めから約4週間、中国を訪れていた高見世話人が帰国しました。詳しい報告は次号となりますが、とりあえずうれしいニュースを。

渾源県の西留郷を訪れた人は、この郷の林業責任者・劉天文さんを覚えてるでしょう？ やさしい大きな目とガンコそうなアゴが印象的な、あの人です。今回は彼の家に泊まりました。

太陽が地平線に沈むころ、村はほのぼのとした空気につつまれます。野良仕事を終えた人たちが、農具をかつい

だり、馬車にのったりしてゆっくり家路につきます。夕食の準備がはじまったのでしょう、家々から煙が立ちのぼります。外でエサをさがしていたニワトリたちも庭の巣箱に帰り、寝場所を争って鳴き声と羽音をたてます。

オンドルに上がり込んで、ジャガイモ、キビ、アワなど土地のものを食べて

いると、今日もまた停電です。外に出ると満天の星空！ ああ、停電もありがたいな。

朝は暗いうちから野良に人影があります。そう、いまは収穫の季節です。

農村のよさは夕刻と朝にあります。貧乏な農家に育った私

は懐かしさについ涙ぐんでしまいました。夏のワーキングツアーの参加者たちに、この体験をしてもらうことができなかったのは返す返すも残念。

「ヤオトン（密洞）を建てて、この村に泊まれるようにしたい」と話したところ即座にOKがでて、郷政府の敷地の一部を借りることになりました。冬がくるまえに整地をし、来年3月末の協力団は「ヤオトンを建てる旅」にもなります。8月のワーキングツアーからここに泊まることができます。

黄土のヤオトンを望んだのですが、地震地帯で危ないと、誰からも反対されました。土のヤオトンは貧乏の象徴で、そこからやっと抜け出ようとしているのに、という思いもあるようです。結局、青レンガづくりで、4間、延べ80㎡のかなりりっぱなものになります。もちろんオンドル（煮炊きの煙を床下に通して暖房します）つきで、簡単な炊事もできます。

西留郷にいれば、私たちはいつでもここに泊まることができます。いうならば、私たちのベースキャンプです。このヤオトンは、私たちの協力の村への定着を大きく促進するでしょう。



ここに私たちのヤオトンが建つ（西留郷）

山西省の自然

石原 忠一

(92年緑化協力団団長)

⑭ 莠 麦 (ユウマイ Avena nuda L.)

獣医の杉田定志さんは、とてもお話のうまい人で、五台山での馬の話から、燕麦を食べすぎて、お腹がふくれて、とうとう苦しんで死んでしまった馬の物語りへと、話題はつきません。ゆくさきぎきで出あう馬や驢馬に親しみをおぼえました。

北京で張香山先生と昼食を共にする機会に、この話をもち出しますと、山西省での抗日武装闘争のとき、鄧小平さんらと共に八路軍の若き将校であったとのこと、"ある激しい戦闘のあと、ようやくありつけた麦食に、久しぶりの満腹を味わったところ、その夜ひと晩中、お腹がはって苦しみとおし、生きたこちがしなかった"と想い出を語られました。

また、中国文学者の竹内実さんとの

対談をまとめた「黄土高原の衣食住」（1984）という本の中で、羅深明（1920年山西省生れ）さんが、次のように語っておられます。

「私の田舎は山西省の北部です。このあたりでは米を主食とすることはできません。主食としていちばんよく食べたのは「莠麦（ユウマイ）」です。これは他所の省ではあまり産出せず、山西省と内モンゴル自治区あたりにしかなく、

「莠麦」の粉、つまり「莠麵」が主食の80%にもなるのは、取れる量もさることながら、腹もちがよいからです。

ところがこの「莠麦」は

他所の土地の人がきてすぐ食べようとしても無理です。慣れるのに数日かかります。2～3日は気をつけて、量を少なくしなければなりません。いきなりお腹いっぱい食べたりすると、あとでお腹がふくらんでたまりません。」

今年も9月を過ぎました。穂がでて収穫をまつころでしょう。高見さんが山西省から手紙をよこして、「山地の農村ではアワ、キビはとれず、もっぱら「莠麦」＝燕麦が主食になっています」とのことです。



段々畑で収穫中のユウマイ（燕麦）



ネパールで現地研修

東 間 徹 (GEN世話人)

この12月からネパール・ムスタン地方の農村に植林その他の研修に行くことになりました。期間は約1年間の予定です。研修先は、ネパールで22年間農業指導と人的開発に献身してこられた近藤亨さん（「ネパール・ムスタン地域開発協力協会」代表）の経営する「シャン農場」です。

私は今年の夏2ヵ月間、GENとアジア自然塾合同のネパール緑化考察団の一員として初めてネパールを訪れた折に、ジョムソンで近藤さんとお会いし、農場を見学させていただいたのが直接のきっかけです。

ポカラからローマタンへの往復1ヵ月間、私たちはヒルの棲む湿地帯と砂塵吹きすさぶ乾燥地帯を野宿しながら歩いてみて、ネパールの自然環境のもつ厳しさをいやというほど実感させられておりました。生きることが精一杯で自然環境の修復など思いもおよばない現地の人たちのつましい暮らしぶりを目のあたりに見て、私たちはかなりショックを受けておりました。さらに、巨額のお金を投資しながら村びとたちに完全に無視されて廃墟同然の姿になっている国際組織の緑化プロジェクト跡地を何箇所か見る機会があっ



て、これまたいへん衝撃的でした。

私はその原因の一つが長期滞在者がいなかったことにあると聞いて深刻に考え込んでしまいました。私たちのほんのちょっとした誤解や現地の社会、環境、風俗習慣等に対する無知が決定的な失敗につながることを痛感させられたからです。日常生活上の極めて瑣末なことが人間の本质を鋭くえぐりだして、決定的な不信を周囲に与えてしまう例はどこにでもあります。そんな場合、関係修復にかなりの時間がかかるものです。

こんなことを考えていた折に、近藤さんにお会いしました。72歳の高齢にもかかわらず自信と精気に満ちた大先輩の存在が大きなものに思えました。考えあぐねた末に、この先生のもとで勉強してみよう。まず具体的な緑化活

動に着手する前に学ぶべきことがたくさんあるはずだと結論をだしました。

私は誰もが海外に長期に生活できる条件があるとは思いませんし、決意してやれることでもないと思っています。しかし、できるだけ現地の人びとと一緒に汗を流し、同じ釜の飯を食う時間が長く持てるように工夫すべきだと考えています。そして現地の人びとの本当のニーズをつかみ、それを手にするための試行錯誤を一緒にやらないかぎり、双方向の協力関係を長期に継続させることは難しいと思うのです。

私は、自分自身のネパールでの緑化活動の第一歩を、「何をやってはならないか」を知ることからはじめるべきではないかと感じています。現地での生活の困難さを思うとき、果たして何箇月もちこたえられるかと考えないでもありませんが、元気で行って参りたいと思います。

こういう機会を与えていただいたネパール現地の近藤さんに深く感謝申し上げますと同時に、まだ結成したばかりで、たくさんやらなければならない仕事を放り出してネパールに行くことを許していただいたGENのみなさんに対して心からお礼を申し上げたいと思います。

六甲山緑化の歴史を学ぶ

国際緑化協力の大きなはげみに

9月13日、神戸市森林整備事務所の和田邦孝さんを講師に迎え“よみがえる六甲山の緑”と題した学習会を行いました。場所は今年オープンしたばかりのオーク2番街7階、弁天町市民学習センター。

私達の知っている六甲とは似ても似つかない荒涼としたハゲ山から、現在の緑豊かな六甲山に変わっていく様子をスライドを使ってわかりやすく説明していただき、また現在の六甲がかか

えている問題なども参加者を交えて話し合われました。

六甲山の植林は1903年から神戸市の手によって進められ、砂漠のような山肌に「空積み」と呼ばれる工法で段々が切られ、そこにマツを始めヒノキ・スギ・カシ等々の苗木が植えられました。一時は年間140haにわたって植林された記録も残っており、先人のたいへんな努力が感じられます。植林1年後、5年後、10年後とスライドを見せ

ていただき、少しずつ広がっていく緑の森を見ていると、学習会に参加させていただいた私たちの黄土高原、そしてネパールへかける情熱も一段と高まり、場所、条件は違っていても、たゆまないGENの活動がいつか実を結び、緑の大地が広がっていくのを感じさせてくれる内容でした。

ひるがえって、後半のフリートークでは、過去の風水害の記録をふり返り、どんどんせり上がる市街地の危険性も指摘。また、慢性とも言える里山維持の労力不足も話題に上がり、今後、ナショナルトラスト運動等、身近な取り組みの必要性も感じさせられました。

ネパール・ヒマラヤを緑に！

ネパール緑化考察の旅を終えて（その2）

GEN代表世話人

佐野茂樹

ネパールでの緑化協力発進にあたって、サウル村での合意成立の意義を明らかにする上でも、改めて今回の行程を記しておきましょう（始めと終りの計30日は割愛。また敬称略）。

ネパール緑化考察団の歩み

【6月】

- 6日（日）アジア自然塾の4人と共に計10人カトマンドゥを出発。NAFAN（註）の3人、シェルパ数人同行。3時ポカラ着。ツラチャン来訪、サウル村12日到着の確認。テント泊始まる。ポーター続々と結集。
- 7日（月）総勢バス・トラックを乗り継いでナヤプルまで。アンナプルナ登山口の宿場町ビレンティ（標高1037m）まで徒歩行。



浸食、山崩れ。石垣に守られた畑。

- 8日（火）朝7時出発。急勾配の山道、1000m以上登ってウレリ（2073m）へ。
- 9日（水）最初の難所、ゴラバニ峠を越え（2855m）、チトレ（2316m）に下る。雨は少なく蛇の襲撃も軽微。我々を歓迎する村人たちの歌とダンスの集いを楽しむ。
- 10日（木）早朝、モンスーンの晴れ間、西方にダウラギリ（8167m）の巨峰を眺望。荘厳な様に感動。シイカ谷を経てカリガンダキ河畔タトバニ（1189m）着。露天の温泉で垢を落とす。
- 11日（金）カリガンダキ沿いに何度も吊り橋を渡って北上。途中、雄大なチャールチャールの滝を経て、ガーサ（2012m）泊。

- 12日（土）カロパニのチェックポストを経て裏山道伝い。河原では強い追い風にあおられて、サウル村第7区へ。標高2600m、50～100人の集落。団員それぞれに環境考察。

サウル村で緑化協力へ

- 13日（日）ツラチャン来る。村幹部とともに各所へ。森林、川、仏教寺院、失敗した苗場跡地、既設の蛇籠現場など。夜、区の村民総員参加の中、相互協力の要点について協議。
- 14日（月）合意書原案を徹夜で作成。

午前中、補正及び翻訳。昼すぎ、双方署名調印の後、チュクチェへ。

激流のカリガンダキ渡渉。この際、東間、掌に深い裂傷。

- 15日（火）早朝、寺院など訪問。河口慈海が学んだ部屋も。ニルギリ（6940m）を仰ぎ見ながら、夕刻

ジョムソン（2700m）着。ムスタン郡の行政中心。人口1300人。

- 16日（水）殆んどが、隣のシャン村、近藤農園を見学。この間、佐野、高力憲子はツラチャンのあっせんで、郡政府主席、中央政府ムスタン郡代表などと会見。
- 夜、NAFANを送るささやかな宴。

- 17日（木）早朝、カグベニに向かう。広がったカリガンダキ河を行く——強い風と日射し、砂ほこりを別にすれば快適トレッキング。夕刻カグベニ（標高2800m）着、ついに王国内に。

- 18日（金）ツラチャン先導で佐野、稲村、高力はダンガルジョン、パリヤク両村へ、馬で早駆け往復。村の人々と植林をめぐる話しあい。標高は

3100mを超えるか。東間、ジョムソンから連絡将校とともに合流。

ムスタン王国へ！

- 19日（土）5時起床。いよいよムスタン王国内部へ。道は険しさを増し、崖伝いの難所に手こずる。馬で往く人々は楽。河原は切り立った大渓谷になり、あたり砂岩段丘は一本もない広大な沙漠。崖っぶちの細い道を往く私たちを、強風と砂塵がたたきつける。3550mまで登ってサマール（3300m）に下る。ここは雪融け水を集めたオアシス。水は豊かで冷たい。水場のまわり、ポプラ、ヤナギの巨木群。萌芽更新の勢い盛んなのに驚く。人口300人。

- 20日（日）次のオアシス・ガミへ。午前中3800mを越えて、わずか2戸のシャンモチェンで昼食。午後一気に最高地点3950mのニイ峠を越えて3550m地点に到着。途中の景観はまさに沙漠。しかし処々に刺の多い灌木が点在。少しでも水に恵まれたところでは松などの自生も。古い切株も。かつては森林か。ガミは祭りの最終日、ツラチャンの好意で寺院の崩す寸前の砂マンガラを覗く。

- 21日（月）村長の子息の案内で、RCDPプラント跡地を見学。米国US-AIDs 500万ドルプランの無残な失敗の一つ。午後、ツァラン（3550m）へ登って下る。80戸、400人。やはり村長の子息の案内で村の各所見学。ここでも放棄されたRCDPプラントの跡地が。ネパール最大の環境問題組織A-CAPの住民の自発性にもとづいての、住居や畑周辺の緑化は成功しつつある。

ローマンタンへ到着

- 22日（火）7時、最終目的地ローマンタンへ。3400mまで下って後、3800mまでひたすら登り行く。高原沙漠の中、延々と一本道を。最後のピークの岩陰から、突如、石の壁で囲ま



れたローマタンが姿を現す。

23日(水) 連絡将校など高山病の徴候、次第に顕著。一日後のムスタン・キングとの会見断念。午前中、緑化状況見学。500年以上も前の3つの寺院参詣。昼すぎ帰路につく。ツァラン泊。

24日(木) 8時出発、強い向かい風の中、シャンモチェンへ。最高地点ニイ峠を越えたあたりでムスタン・キング一行と出会う。子供3人、馬は5頭。あいさつを交わす。少し雨が降り、寒い。シャンモチェンは戸数2、強風を避け低地にテントを。

25日(金) サマールを経てチョクサンへ。荒涼たる砂岸段丘から往年の森林跡をしのびながらさらにカリガンダキの大渓谷沿いに下る。チョクサンでは人々が声を合わせ調子を取りながら大麦の脱穀、また、ゾウや牛による耕き起こし。ソバを播くのか。3000m近くに下り、連絡将校も体調回復。途中、河原で一群の人々がとり囲まれているのを目撃。あとで、チベットからの亡命者17名と知る。ジョムソンに送られ、チベットの中国当局に強制引き渡しされるとか。噫!

26日(土) 8時発、昼頃全員カグベニへ。難所の崖つぼちはそれぞれにクリア。20m内外の強風に向かって河原をジョムソンへ。

カトマンドゥでの反政府大闘争——多数の死傷を出す、のニュース。

27日(日) 数日間、用件処理と休

養のため、ジョムソンに滞在することにする。

夜、ツラチャンの招きで夕食。

(以後、アジア自然塾4人は、トロン峠(5300m)を越えマナン経由でポカラへ。奥村、森脇はシャンの近藤農場へ数日の研修、残る4人は復路を若干修正して、徒歩でポカラへ行くこととする。数日間、気象悪く飛行不能。)(また、この間に、近藤宅訪問、ムスタン郡政府主席へのあいさつ、中央政府ムスタン郡代表とのミーティングなど。)

29日(火) 14日の合意書補正のため、ツラチャンの案内で佐野、稲村、サウル村へ。村長らと協議、土地無償貸与期間20年、広さ50ロパニ(2.5ヘクタール)など確認。村人の同意署名は続々と集まっている。徒歩の日帰り往復、スピード強行軍。

[7月]

1日(木) GEN 4人、徒歩行再開。カリガンダキ沿いに下る。日射し豊か、風穏やかで快適な道行き。自生する森林、劇的なランドスライド、あちこちの蛇籠施工の様子などを見ながら。サウルの対岸コバン付近の、ポプラ、ヤナギの植林の成功が嬉しい。次第に雨模様(モンスーン地帯に入る)の中、レーテ着。夜半より大雨、テントの中、ズブぬれ。

2日(金) ガサを経てタトパニへ。激流の谷を挟む山々には次第に針葉樹系から広葉樹に変わり、樹種も多様化。暑苦しくジトジトしてくる。

タトパニに2日滞在。疲れ切ったポーターたちは大歓迎。物価もジョムソンよりずっと安いので喜ぶ。

4日(土) 昨夜来、雷を伴った豪雨。河の水量、流速ともに増勢。ずぶぬれで難渋しながら夕刻ベニに。暴雨のためテント不能、安宿に泊まる。ポーター数人が道を誤り、夜半に到着。

5日(日) 雨あがり、河沿いに下る。道は田園地帯に入る。水田、そして畑にはたわわなトウモロコシ。古来からの生活道路を抜けると幹線道路工事現場に到達、ナヤプールだ。バラック様の飲食店が密集。ポカラからここまで舗装道路が完成、更に奥に伸ばそうとしている。暑さに苦しみながらクスマまで登り行く。夕刻よりの雨の中、到着。安宿泊。

6日(火) 久しぶりのバスでポカラへ。超満員。午後ポカラ着。

7日(水) 奥村、森脇合流

8日(木) 自然塾一行マナンより帰還。

我々を待っていたのは酷暑のポカラ、闘争の渦のカトマンドゥであった。更に背後には、すぐにも記録的な大洪水がネパール各地に迫っていたのであった。

註 NAFAN: ネパールの環境NGO
Natural Farm Nepal

ネパール緑化資金にご協力を!

緑の地球ネットワークは、今年6、7月に、ムスタン郡サウル村との緑化協力の大要について合意が成立、いよいよ着手にむけて一歩ふみだすことになりました。さしあたっては、カリガンダキ川沿いの小地点で、20年の射程で、ゆっくり、ゆっくり試行錯誤を重ねながらも確実に進めていきます。本年12月から来年4月にかけて、最初の起ち上がりを築きたいと思います。

①サウル村に 900㎡の苗場2か所建設(整地及び囲いの石垣積みなど)。

②GEN事務所兼長期滞在者用宿泊施設建設。

③サウル村を流れる暴れ川・タマ川の治水工事協力を開始。

モンスーン入り前に、最初の育苗試験を始めるのが狙いです。所要資金は、4月まで、資材及び工事・運搬費のみで総計約 130万Rsルピー(約 325万円)です。

皆様方の絶大な資金協力をお願いする次第です(郵便振替用紙通信欄にその旨ご指定ください)。

ネパールで1年間緑化研修 東間徴さんに支援基金を!

GEN世話人の東間徴さんが、自身の発意で1年間ネパールに緑化研修で行きます。行き先は東間さんが記している通りです。

研修は強風・砂塵・極寒の中のリング剪定から始まります。

私たちも、彼の準備がよく整うよう、また謙虚な研修生活が成功するようお願い支援基金を募りたく思います。

ご協力をお願いします。(郵便振替用紙に、東間さん支援基金とご指定ください)。

北海道の森林破壊とアイヌ民族①

武田 繁典 (GEN世話人・高校教員)

1. 今年(2020年)は国連の国際先住民年

1993年は国連が「世界の先住民の国際年」と定めた年です。世界の歴史のなかで、ほかの土地からその土地へ、人間が移り住んで「開発」「発展」した例はたくさんあります。しかし、そのときすでにその土地に住んでいた人達はどうかだったのでしょうか。仲良く共存した場合もあるでしょうが、多くの場合、後からきた人々が「発展」するにつれて、先住者は「文明のおくれた民」として迫害、抑圧されて来ました。外来者が先住者と異なる独自の生活様式、考え方、言語、文化などを持っているときはなおさらです。このとき外来者はひとつの民族であると言えますが、しかし、先住者もまた、独自の文化を持った民族なのです。

例えば、500年前南北アメリカ大陸に、200年前オーストラリア大陸にヨーロッパから多くの人間が移住してきたとき、先住民族と外来者の間の悲劇の歴史が始まったのです。国際先住民年は、このような歴史のなかで奪われてきた先住民族の権利を回復するために、世界中の国連加盟国が国連の場やそれぞれの国内で活動する年として定められたものです。

2. 日本は単一民族国家か

1986年、ときの中曽根首相は「日本は単一民族国家である。アメリカは混血で知識水準が低い」と発言して内外の反響をかいまして。本当に日本は単一民族国家でしょうか。独自の言語、生活様式、宗教などの精神世界をもっていたアイヌの人達の存在をどう考えているのでしょうか。1899年にできて今も生きた法律として存在する『北海道旧土人保護法』は何なのでしょう。

現在、政府は「日本には少数民族が存在する」と公に認めています。国際先住民年にも賛成し、わずかながら拠出金も出しています。しかし、「国際

的な「先住民族」の定義がないから、アイヌが先住民族かどうかかわからない」として、アイヌの先住民族としての権利に目をつむっています。

では私達はどうかでしょう。世界の先住民族やアイヌ民族のことをどれほど知っていて、考えていたのでしょうか。

3. 北海道とアイヌ民族の歴史

1869年(明治2年)明治政府はそれまで、幕府、松前藩などの封建的支配下にあった「えぞ地」に開拓使を設置し北海道と改めました。「えぞ地」という言葉も北海道という言葉も、そこにもともと住んでいた人々にとって外来者である日本の支配権力の側からつけられた名前です。

外来者が来る前そこには、自らをアイヌと呼ぶ人々が北の大地の自然の中で暮らしていました。アイヌとはアイヌ語で人間という意味です。アイヌの少女知里幸恵は『アイヌ神謡集』の序に、「その昔この広い北海道は、私達の先祖の自由な天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人たちであつたでしょう。(後略)」と表現しています。

文化史的にみまると、2万年ぐらい前から、先土器(旧石器)文化、縄文文化、続縄文文化、と続き、擦文文化とオホーツク文化が並立した時代を経て、13世紀末にアイヌ文化が成立したと考えられています。西日本を中心にした歴史と大きく違うところは、稲作の移入による弥生文化、それに続く中央集権的な国家形成の歴史がないことです。これらは朝鮮、中国から東南アジアまでの大陸文化を幅広く取り入れた結果成立したものです。文化だけで

なく人間もたくさん渡来してきたので、混血もすすみました。それが私達の先祖だと考えられています。

人類学上の人種の研究や議論では確定的な説はまだありませんが、大陸文化や渡来人が入ってくる前には、日本列島のかかなり広い範囲にアイヌ人の先祖が住んでいたという説もあります。西日本を含め各地にアイヌ語を起源とする地名が多く残っているそうです。「アイヌ語は日本語の重要なルーツ」



かつて森林が伐採され、いまダム建設で破壊されようとしている着工前の沙流川と二風谷(写真提供=西浦宏己さん)

ととなえる学者もいるほどです。

11世紀ごろには東北地方から交易を求めてえぞ地に和人が来はじめましたが、15世紀になると、都市と商業が栄えた本州から商人達がさかんに来るようになりました。始めは対等、互恵の交易だったのでしょうが、だんだんと不平等で略奪的なものになり、トラブルが起きました。1457年コシャマインの戦い、1669年シャクシャインの戦い、1789年クナシリ・メナシの戦いなどは和人の横暴に耐えかねたアイヌの人々の一斉蜂起でした。いずれも圧倒的な武力と卑怯なだまし打ちによって敗北させられてしまいます。室町時代の安藤氏から、豊臣政権下の蠣崎氏、江戸時代の松前藩と長年にわたり富を築く略奪の対象とされていくうちに、アイヌ民族の生活基盤は大きく破壊されていきました。幕末になって英国、ロシアなどの列強国がえぞ地の権益を求めて来航するようになると、幕府はえぞ地の領有権を確立するために直轄

地とし、アイヌ民族に対して同化政策をとるようになりました。アイヌ語に替わって日本語、カナ文字を奨励、氏名を和風名に改め、領民として人別帳に記載、髪形や服装など風俗や生活習慣も和風名に改めさせて、「帰属土人」として褒賞したり、伊勢神宮の御札を配布したりしました。しかし、一方では出稼ぎに来る和人に対する規制をゆるめたので、1798年27,000人ほどだったのが、1854年には64,000人ほどに急増したという記録が残っています。このような政策が明治政府に引き継がれていったわけです。

4. アイヌモシリの森林破壊

アイヌ語で「人間の住む静かな大地」を意味するアイヌモシリ、知里幸恵が思い描いた美しい大自然は今どこにあるのでしょうか。アイヌの人々が生活の糧を求め精神の拠り所とした森林を、外来者である私達の先祖がどのように破壊していったか、歴史を追ってみようと思います。

アイヌ独自の伝統的なやりかたのことをアイヌブリと言いますが、アイヌブリではサケでもシカでも、山菜でも木でも、決して取り尽くすことをしません。木の皮で着物を作りますが、木が枯れないように一部分だけ皮をはぎ、そこが治るまで待ちます。オオウバユリは花が咲いたものは取らず、ギョウジャニンニクは球根を残します。最近、環境問題で注目されている、サ

スティナブル・ユージング（持続可能な利用）そのものです。

そのようにして守られてきたアイヌモシリの森林に金儲けだけを目的にした和人達が入って来たのだからたまりません。まず目を付けられたのが道南、桧山地方のヒバの森林でした。ヒバはヒノキに似ているので、17世紀後半江戸、大阪に送られるようになります。原因は、人口増加にくわえて江戸の大火による木材需要の増大、商業資本、海上交通の発達です。ヒバに続いて奥地のエゾマツの伐り出しを始めた飛騨屋久兵衛は三代60余年にわたって財をなしたといわれています。

明治になって、諸藩の下級武士や農民の次男三男中心に開拓民が入って来ると、どんどん森林を伐採していききました。運び出せない所では、1メートル以上の木もその場で焼いてしまったようです。私は1989年の北海道旅行の時、標茶町の郷土館で、開拓時代の直径1メートルもの大木の切り株をそのまま残した田で働く人の写真を見て愕然としました。開拓民も大変だっただろうが、ほんの少し前はそこはすばらしい原生林で、そこから追い払われた先住民であるアイヌの人達はどこへ行っただろうと暮らしたのだろうか。

しかし、明治中期になって政府の開拓の方針が貧民救済から資本育成、大企業中心になると、森林の大規模払い下げや鉄道施設によって飛躍的に森林伐採が拡大します。建築材のほかマ

ツの軸木、枕木、エンピツ、銃床など、なかでも注目すべきは、外貨獲得のためのナラ材の輸出と製紙工業でしょう。

いま東南アジア、アマゾンなどの国々で、中央政府が地方の先住民族を抑圧して、森林を伐採し輸出しています。日本はその政府の外貨欲しさにつけいっています。また、明治政府は富国政策の中で、新聞用紙の自給をめざし、製紙工場を各地に作り、明治40年代に富士製紙、王子製紙などが北海道に進出してきます。三井財閥系の王子製紙苫小牧工場では、周辺の森林を乱伐していき、専用軽便鉄道まで作って森林破壊を拡大していきました。今年フォーラムが開かれた二風谷はアイヌ語でニプタニ、木が多く生えているところという意味だそうです。しかしその周辺のエゾマツ、トドマツの大木も全て伐採され、そこを流れる沙流川に流され、下流の町から軽便鉄道で苫小牧まで運ばれました。三井は二風谷周辺でも膨大な利益を得て、今も山林大地主として居座っています。1992年になくなれた貝澤正氏は、『三井物産株式会社社長への訴え』としてこの山林を元々の持ち主であるアイヌ民族に返すよう訴えています。私達は今、紙の浪費と紙パルプ用森林資源を世界中から収奪している国に住んでいます。この原点は100年前の北海道にあったとすることができますでしょう。

(以下次号)

稲刈り・炭焼き・トリ捌き／

この秋に、お百姓さんのお手伝いを企画しました。行き先は、兵庫県朝来郡の大森昌也・信子さん方（☎ 07967-5-2959）。11年前百姓を志した大森さん一家は、7年前廃村寸前の和田山町朝日に定着。以来、田畑の仕事に加えて家畜、トリを飼い、炭を焼き、天然酵母パンを作って、過疎の中の生活を築いてきました。

GENからもこれまでに何回も、数多くの人々が訪ね、交流しました。今回は秋たけなわの稲刈り時。下手でも遅くても一所懸命、力いっぱい労働

でお手伝いしてみませんか。折しも天明・天保以来の大凶作。改めて農を本とすることの大切さを噛みしめることになりましょう。

【集合の日時・場所】

10月23日午前9時15分

J R京都駅山陰本線ホーム

「園部」行普通列車最前部・集合

【必要経費・用意するもの】

京都ー和田山間往復交通費3700円

・子供たちへのおみやげ

・軍手、荒仕事に適した服装、帽子、

サングラス（日除け用）

※24日夜7時55分JR京都駅到着予定

●問合せ、申込みはGEN事務所へ

TEL. 06-583-1719、FAX. 583-1739

先住民族とともに祈り、ともに生きる！

セイクレッド・ラン日本事務局代表
堀越由美子さんを囲む車座トーク

民族としての再興と自己のアイデンティティ（存在根拠）充実に向けて、世界の先住民族は烈々と闘いつづけています。先住民族の生活に深く触れ、私たち自身を豊かにし、浄化したいと思います。

11月13日（土）13時30分～17時
大阪市立弁天町市民学習センター
（J R・地下鉄弁天町ORC2番街）
参加費 500円

主催・緑の地球ネットワーク

私の本棚

先住民関連文献抄録—私の場合 佐野茂樹

民族絶滅の危機に追いやられてきた先住民の過去と現状に謙虚に学び、未来に向け共に歩む必要があります。とりわけ環境と親密な共生関係——調和と均衡を保ってきた先住民の生活に脈打つ魂にふれると、心の底から蘇る気がします。そこで、数多く私が接した関連文献の一部を、説明抜きでお伝えすることにします。私たちは「現場仕事」(フィールドワーク)に徹底する一方で、絶えず「入魂」が必要です。先住民と日常直接に触れることが最良ですが、それが充たされない時、先住

民の訴えを文字を通して受けとめることに努めたいものです。

〔南北アメリカ先住民民族関連〕

- ①「インディアスの破壊についての簡潔な報告」ラス・カサス著 岩波文庫
- ②「聖なる魂」デニス・バンクス著 森田ゆり訳 朝日新聞社
- ③「アメリカ・インディアン悲史」藤永 茂著 朝日選書
- ④「夜明けへの道」堀越由美子企画監修 人間家族
- ⑤「コロンブスが来たら」T. R. バージャー著 朝日選書〔アイヌ民族関連〕
- ①「アイヌ民族抵抗史」新谷 行著 三一新書
- ②「アイヌ神謡集」知里幸恵編訳 岩波文庫

③「ク スクップ オルシペ」

砂沢クラ著 福武文庫

④「アイヌの里 二風谷に生きて」

萱野 茂著 北海道新聞社

⑤「静かな大地—松浦武四郎とアイヌ民族—」

花崎皋平著 岩波書店

〔チベット民族関連〕

①「チベットわが祖国」

グライ・ラマ著 中公文庫

②「愛と非暴力」

グライ・ラマ著 春秋社

③「チベットの娘」

R. D. タリン著 中公文庫

④「チベット白書」

英国議会人権擁護グループ報告

日中出版

⑤「雪の国からの亡命」

J. F. アベドン著 地湧社

A SEED 関西の主催で ネパール報告会開かる

9月26日、A SEED KANSAI (以下ASK) が主催する SALON DE A SEEDで「ネパール緑化考察団参加体験記」と題して喜多亮夫さんの体験発表がありました。大学構内にポスターを貼りまくったASKスタッフの努力の甲斐あって参加者約20人を集めての盛況でした。女性の参加者が多く、講師は少々緊張したようでしたが、スライドを使って歩いてきた所、見てきたもの、感じたことなどを話してくれました。

参加者のみなさんも積極的で次々と質問が出て、ネパールにおけるNGOの緑化協力の現状や、現地の人の生活などについて話はずみしました。かつて巨費が投入された国際緑化協力の跡地に、今は1本の木すら残っていないかという報告にはみんな愕然としていました。外国からの押し付けの「協

力」は根づかない、やはり草の根からの民衆の協力が必要だと感じました。

今回初めてASKに来た人、ASKのスタッフたち、みんなまだ湯気をたてているような喜多君の話にそれぞれ感じるものがあつたようです。

ASKについては以前紙面で紹介していますが、世界に繋がるネットワークを持つ環境問題を考える関西の青年グループです。毎月2回の学習会をはじめ、さまざまな活動を行っています。GENの若いメンバーも何人か参加しています。興味のある方は下記までお問い合わせください。

大阪市中央区今橋 1-7-2山富ビル7F
グローバル環境文化研究所内
A SEED KANSAI
TEL: 06(222)3263 *木曜夜7時~
10時のみ通話可

GENの力を拡大するため

会員になってください!

中国・黄土高原における緑化協力につづいて、いよいよネパールでも草の根協力を具体化します。生まれたばかりの緑の地球ネットワークにとって、いまは重要な飛躍のとき、地力の拡充が強く求められています。1人でも多くの方が会員になって、これらの活動をともに支えてくださるようお願いいたします。

●会費(1口1年分)

一般会員	12,000円
家族会員(2人目から)	6,000円
学生会員(高校生以上)	3,000円
ジュニア会員(小中学生)	1,000円
団体会員	12,000円
賛助会員	100,000円

(以上の会費には会報の購読料が含まれています)。

●会報購読料

1年分(送料とも)	2,000円
-----------	--------

●緑化基金

金額は問いません。日本の私たちには小さな金額でも、円高がすすむなか協力の現地ではびっくりするほど大きく役立てることが出来ます。協力地域などに希望がありましたら、郵便振替用紙の通信欄に「〇〇緑化資金」というふうに使途を指定してください。

GEN自然と親しむ会

Xmas用トピアリ作り

●12月5日(日)朝9時30分~

●三宮そごうデパート東側市バス25番乗り場集合

参加費 1000円(材料費・植物園入園料・保険料含む)

神戸市立森林植物園周辺で木の実や枯れ葉を採集して、クリスマスツリーに似た「トピアリ」を作ります。講師はドイツで学んだフラワーデザイナーの田中まさみさん。雨天時も、事前に用意した材料で行います。

